

植村勝彦・新美明夫 1981 心身障害幼児をもつ母親の  
ストレスについて——ストレスの構造—— 特殊教育  
学研究, 18(4), 59-69.  
植村勝彦・新美明夫 1982 心身障害幼児をもつ母親の

ストレスについて——ストレス・パタンの分類——  
特殊教育学研究, 19(3), 20-29.

——1984. 7. 12. 受稿, 1985. 3. 9. 受理——

*The Japanese Journal of Psychology*  
1985, Vol.56, No.4, 237-240

資 料

## 高校生における孤独感と自己意識

静岡大学 諸 井 克 英<sup>1</sup>

Loneliness and self-consciousness in high-school students

Katsuhide Moroi (*Department of Sociology, Faculty of Humanities and  
Social Sciences, Shizuoka University, Ohya, Shizuoka 422*)

To examine relationships between loneliness and various aspects of self-consciousness in high-school students, UCLA Loneliness Scale (Russell, Peplau, & Cutrona, 1980), Self-Esteem Scale (Rosenberg, 1979), Self-Consciousness Scale (Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975), Self-Monitoring Scale (Snyder, 1974), and a High-School Life Questionnaire were administered to the first grade students in a high school ( $N=182$ ). Loneliness ( $\alpha=.885$ ), higher for males than for females, was significantly correlated with various aspects of their high-school lives. Loneliness was negatively correlated with self-esteem and self-monitoring, and was positively correlated with social anxiety. Only for males, a positive correlation was obtained between loneliness and private self-consciousness. Discriminant analysis and other correlational analyses also suggested that loneliness in males was related to various aspects of self-consciousness.

Key words: UCLA Loneliness Scale, loneliness, self-esteem, self-consciousness, self-monitoring.

Peplau ら UCLA の研究グループは、孤独感は人の社会的相互作用についての願望水準と期待水準との間のずれによって生じると考え、孤独感の強さを測定する UCLA 孤独感尺度を作成した (Russell, Peplau, & Cutrona, 1980)。その後、この尺度を用いてさまざまな研究が行われている。わが国においても、工藤・西川 (1983) によって、尺度の信頼性および併存的妥当性の検討が行われ、その両者について肯定的な結果が得られている。

ところで、この尺度を用いた Peplau らの一連の孤独感研究では、被験者は大学生に限定されている。工藤・西川 (1983) は、高校生から成人アルコール症患者にいたるさまざまな標本に尺度を実施しているが、尺度の妥当性の検討を各標本ごとに行っていない。したがって、大学生以外のさまざまな標本についてこの尺度の適用の妥当性を検討することは、尺度の一般性という点で重要であろう。本研究では、青年期中期にあると見做さ

れる高校1年生について UCLA 孤独感尺度の信頼性や併存的妥当性を検討することを第1の目的とする。

Russell et al. (1980), Jones, Freeman, & Goswick (1981), および工藤・西川 (1983) は、孤独感と自尊心との間に負の関係があることを見出している。また、Jones et al. (1981) は、Fenigstein, Scheier, & Buss (1975) によって作成された自己意識尺度と孤独感との関係を調べ、(a) 男女ともに、高孤独者は、自己を社会的対象として意識する傾向 (公的自己意識) が強く、他者の存在によって生じる不快感 (社会的不安) も高い、(b) 女子に限れば、高孤独者は自己内部の考えや感情への注意傾向 (私的自己意識) が強い、という結果を得ている。

ところで、Snyder (1974) は、人には、自分の行動の社会的適切さへの関心から、他者の行動に敏感になり、自分の行動を統制する傾向、すなわちセルフ・モニタリング傾向があると主張している。高孤独者は、そのようなセルフ・モニタリング傾向は弱いと予測される。

本研究では、孤独感に関係があると考えられる自己に

<sup>1</sup> 本論文作成にあたり御指導を賜った名古屋大学文学部辻 敬一郎教授に深く謝意を表します。

関する意識の状態（以下、自己意識傾向と呼ぶ）のさまざまな側面と孤独感との関係を明らかにすることを第2の目的とする。さらに、先述した孤独感と自尊心との関係が、私的および公的自己意識の水準によって影響されるかをも調べる。加藤（1973）によれば、高校1年生がおかれている青年期中期は“主観的な世界の中で自己との戦いに没頭している時期”（p.41）と特徴づけられる。したがって、高校1年生における自己意識のさまざまな側面と孤独感との関係を明らかにすることは、今後、青年期の各時期での孤独感の様相の推移を理解していく上で重要であるといえる。

## 方 法

**被験者および質問紙の実施** 名古屋市内の県立普通高校1年生（男子89名、女子93名）に、“高校生の生活意識”調査の名目で、1984年3月上旬に質問紙を実施した。

**質問紙の構成** 質問紙は、回答者の基本的属性や高校生活に関する質問（親友数などを直接記入する項目群と、満足度などを4点尺度で評定する項目群と）からなる。後者では、回答が肯定的であるほど高得点になるようにした）とともに、次の4尺度から構成されている。

1. UCLA 孤独感尺度：Russell et al. (1980)による改訂版を用い、20項目のそれぞれについて、日ごろ自分が感じている程度を“たびたび感じる”から“決して感じない”の4点尺度で評定させた。孤独感が強いほど高得点になるようにした（1点から4点）。

2. その他の尺度：Rosenberg (1979)の自尊心尺度（10項目）、Fenigstein et al. (1975)の自己意識尺度（23項目）、および Snyder (1974)のセルフ・モニタリング尺度（25項目）を用い、それぞれの項目が自分自身にあてはまる程度を“かなりあてはまる”から“ほとんどあてはまらない”の4点尺度で評定させた。当該の尺度の概念に一致するほど高得点になるようにした（1点から4点）。

なお、4尺度の順序効果をなくすために、各尺度はランダムに配列し、さらに項目の順序効果をなくすために、各尺度で項目順序の異なる4つのタイプの尺度を用いた。

## 結 果

**孤独感尺度の検討** 1. 信頼性および尺度得点：尺度の内的整合性を検討するために、GP分析を行ったところ（上位群26.4%、下位群23.6%）、20項目すべてで有意差が見出された（ $t=5.00-12.44$ ,  $df=50.85-89$ ,  $p<.001$ ）。さらに当該項目での得点と当該項目を除く総和得点との相関（以下、 $r_i$ と略す）もすべての項目で有意であった（ $r_i=.274-.629$ ）。したがって、20項目

はいずれも高い弁別力を持つと考えられる。20項目でのCronbachの $\alpha$ 係数は.885（男子.858；女子.899）であり、合計得点の分布は正規分布であった（Kolmogorov-Smirnov テスト,  $Z=1.00$ ,  $n.s.$ ）。したがって、高校1年生においても、20項目からなる孤独感尺度の信頼性は高いと結論できる。20項目の合計得点を孤独感得点とした。全体の平均値は38.68（ $SD=9.01$ ）であったが、男子のほうが（ $\bar{X}=40.65$ ,  $SD=8.59$ ）、女子よりも（ $\bar{X}=36.80$ ,  $SD=9.04$ ）、孤独感が有意に強い傾向が認められた（ $t=2.95$ ,  $df=180$ ,  $p<.01$ ）。

2. 孤独感と高校生活：尺度の併存的妥当性を検討するために、孤独感得点と高校生活の諸特徴との関連を調べた。男女ともにみられた孤独感得点の高い者の特徴としては、（a）母親に対する満足度が低い（ $r=-.254$ ,  $df=179$ ,  $p<.001$ ）、（b）同性の親友が少なく（スピアマンの順位相関： $r_s=-.407$ ,  $df=180$ ,  $p<.001$ ）、同性の親友の状態についての満足度も低い（ $r=-.449$ ,  $df=180$ ,  $p<.001$ ）、（c）サークル活動への熱意が低く（ $r=-.147$ ,  $df=174$ ,  $p<.10$ ）、サークル内の人間関係への満足度も低い（ $r=-.259$ ,  $df=174$ ,  $p<.001$ ）、（d）塾通いをしていない（ $t=-2.22$ ,  $df=83.96$ ,  $p<.05$ ）、が挙げられる。その他、男子については、クラス内の雰囲気ネガティブに認知する（ $r=-.286$ ,  $df=87$ ,  $p<.01$ ）、女子については、異性の親友が少ない（ $r_s=-.225$ ,  $df=91$ ,  $p<.05$ ）という特徴が孤独感得点の高い者に見出された。通学時間、家庭学習の時間、親との会話頻度、父親に対する満足度、異性の親友の状態についての満足度、サークル活動の種別や練習時間、きょうだい構成については有意な傾向は認められなかった。

**その他の尺度の検討** 以下の記述での項目番号は、それぞれの原尺度での番号に従っている。

1. 自尊心尺度：項目分析の結果（ $r_i=.473-.677$ ）、項目8を除く9項目での合計得点を自尊心得点とした。 $\alpha$ 係数は.851（男子.857；女子.839）であった。

2. 自己意識尺度：23項目について因子分析（主因子法）を行い、3因子解を求めた（説明率：47.0%）。直交回転後の因子負荷量を検討すると、原尺度での私的自己意識因子、公的自己意識因子、および社会的不安因子が、それぞれ、本研究での第I因子、第II因子、および第III因子にほぼ対応していることが明らかになった。また、男女別に因子分析を行い、3因子解を求め（説明率：男子49.0%；女子47.7%）、Harman (1967)に従って、因子の類似度を検討したところ、男女の結果はかなり類似していることが確認できた（第I因子.945；第II因子.921；第III因子.945）。したがって、全体での因子分析の結果に基づき、因子負荷量.400を基準として、私的自己意識尺度項目（第I因子：項目1, 3, 5, 7, 9, 13, 15, 18, 20, 22）、公的自己意識尺度項目（第II因

Table 1

孤独感と自己意識傾向との相関 (ピアソン相関)

	男子 (N=89)	女子 (N=93)
自尊心	-.480***	-.522***
私的自己意識	.254*	.053
公的自己意識	.027	.094
社会的不安	.301**	.419***
セルフ・モニタリング	-.221*	-.296**

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

子：項目 11, 14, 19, 21), および社会的不安尺度項目 (第Ⅲ因子：項目 4, 10, 12, 16, 23) を選別し, それぞれの合計得点を下位尺度得点とした。下位得点相互の関係は, Fenigstein et al. (1975) の結果に類似していた (I-II :  $r = .339$ ,  $p < .001$ ; I-III :  $r = .138$ ,  $p < .10$ ; II-III :  $r = .321$ ,  $p < .001$ ). それぞれの下位尺度での  $\alpha$  係数は .845 (男子 .858; 女子 .831), .820 (男子 .818; 女子 .823), および .736 (男子 .728; 女子 .749) であった。なお, 各下位尺度について項目分析を行い, 各項目の弁別力を確認した (私的自己意識尺度 :  $r_i = .400 - .643$ ; 公的自己意識尺度 :  $r_i = .567 - .759$ ; 社会的不安尺度 :  $r_i = .462 - .545$ ).

このように, 大学生を調査対象とした菅原 (1984) と同様に, 高校 1 年生においても私的自己意識因子と公的自己意識因子とが得られたことは——ただし, 菅原 (1984) では新たに作成した項目が含まれている——, この 2 次元が少なくとも青年期中期には形成されていることを示している。

3. セルフ・モニタリング尺度：岩淵・田中・中里 (1982) は, 大学生にセルフ・モニタリング尺度を実施し, 外向性, 他者指向性, および演技性の 3 因子を抽出している。本研究でも因子分析を試みたが, 抽出された因子の解釈が困難であり, 男女の結果もかなり異なっていたことから, 項目分析のみにとどめた。その結果 ( $r_i = .172 - .588$ ), 項目 2, 7, 9, 11, および 16 を除く 20 項目での合計得点をセルフ・モニタリング得点とした。20 項目での  $\alpha$  係数は .787 (男子 .800; 女子 .777) であった。

なお, 私的自己意識得点, 公的自己意識得点, 社会的不安得点, およびセルフ・モニタリング得点については性差が見出されなかったが, 自尊心得点では, 男子のほうが ( $\bar{X} = 24.06$ ,  $SD = 5.00$ ), 女子よりも ( $\bar{X} = 22.33$ ,  $SD = 4.83$ ) 高い傾向が認められた ( $t = 2.37$ ,  $df = 180$ ,  $p < .05$ ).

孤独感と自己意識傾向との関係 1. 相関分析：Table 1 に, 孤独感と自己意識傾向との相関が男女別に示してある。男女ともに, 高孤独者は, 自尊心が低く,

Table 2

低孤独者と高孤独者との自己意識傾向の特徴  
——判別分析——

		標準化判別係数	
		男子	女子
自尊心		.655*	.827*
私的自己意識		-.603*	-.217
公的自己意識		.469	.131
社会的不安		-.467	.051
セルフ・モニタリング		.338	.434
重心	低孤独群	.922	.657
	高孤独群	-.768	-.629
分類成功率	低孤独群	90.0%	77.3%
	高孤独群	83.3%	78.3%
	全体	86.4%	77.8%

\*  $p < .05$

Table 3

孤独感と自尊心

上段：男子		公的自己意識		
下段：女子		低群 [4—10]	中群 [11—12] 高群 [13—16]	
私 的 自 己 意 識	低群 [12—24]	-.483(15) <sup>†</sup>	-.481(11)	-.840 (6)*
	中群 [25—29]	-.792(10)**	-.811 (7)*	-.647 (6)
	高群 [30—39]	-.685 (6)	-.358(14)	-.044 (8)
		-.271(11)	-.618(19)**	.303 (8)
		-.941 (4) <sup>†</sup>	-.661(11)*	-.073(14)
		-.743(11)**	-.242(10)	-.624(11)*

[ ] 内：得点範囲 ( ) 内：ケース数  
\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$  †  $p < .10$

社会的不安傾向が高く, さらにセルフ・モニタリング傾向が低いことを示す有意な相関が得られた。また, 男子でのみ, 高孤独者が自分の内面に注意を向ける有意な傾向が認められた。前者の結果は従来の研究知見あるいは予測と一致するが, 後者の結果は Jones et al. (1981) の男女大学生での結果とは異なる。

2. 判別分析：孤独感と自己意識傾向との関係をより明確にするために判別分析を行った。男女それぞれの孤独感得点分布での上位, 下位 25% を基準に低孤独群 (男子：20 名, 24—33 点; 女子：22 名, 22—29 点) と高孤独群 (男子：24 名, 46—63 点; 女子：23 名, 42—61 点) とを選別し, 自己意識傾向に関する 5 変数を説明変数とする判別分析 (一括投入法) を行った。その結果を Table 2 に示す。男女ともに, 有意な判別関数が得られたが (男子： $F = 5.64$ ,  $df = 5/38$ ,  $p < .001$ ; 女子： $F = 3.38$ ,  $df = 5/39$ ,  $p < .05$ ), 分類成功率は男子のほうがいくぶん高いといえる。男子では, 自尊心と

私的自己意識の判別寄与度が高かった。有意ではないが、セルフ・モニタリングおよび社会的不安の判別係数の方向は予測に一致しているが、公的自己意識での傾向は Jones et al. (1981) の傾向と逆であった。女子では、自尊心の判別寄与度が高く、自己意識尺度での3下位尺度はほとんど判別に寄与していないといえる。

3. 孤独感と自尊心との関係：有意な負の相関が見出された孤独感と自尊心との関係が私的および公的自己意識の強さによって影響されるかをみるために、2種の自己意識のそれぞれの得点分布の上位、下位30%を基準にして被験者を9分割し、それぞれの水準での孤独感と自尊心との相関を求めた。その結果を Table 3 に示す。男子では、2種の自己意識水準の高低差が顕著なときには高い負の相関がみられ、ともに高水準であるときには孤独感と自尊心とは無関係であるという興味ある傾向が見出された。女子では、一般に孤独感と自尊心との間には高い負の相関がみられ、2種の自己意識水準による系統的な影響は認められなかった。

### 考 察

高校1年生においても、UCLA 孤独感尺度は信頼性が高く、高校生活の諸特徴との関連から併存的妥当性もあるといえる。なお、男子の孤独感女子よりも高かった。調査時期が高校1年生の終わりごろであることを考慮すると、この性差が一般的に存在するのか、あるいはある時期に出現するのかという問題が生じる。工藤・西川 (1983) も指摘するように、大学入学などによる生活事態変化の影響で性差が生じることが考えられる。しかし、本研究の被験者が、(a) 高校入学という生活事態変化からほぼ1年経過した時期にあること、(b) 男女ともほぼ全員が自宅通学者であること(下宿者：男子2名)、さらに(c) 学力面では男女ともほぼ同水準にあること、を考えれば、青年期中期に男子の孤独感が女子よりも高いという結論は妥当であろう。しかし、より一般的な結論を下すには青年期における孤独感の推移についてのさらなる研究が必要である。

孤独感、従来の研究知見や予測と一致して、自尊心およびセルフ・モニタリング傾向との間には有意な負の関係、社会的不安との間には有意な正の関係があることが見出された。ところが、孤独感と私的および公的自己意識との関係については、Jones et al. (1981) とまったく異なる傾向が得られた。つまり、男子での孤独感と私的自己意識との相関のみが有意であった。さらに、判別分析の結果も性差を明確にしている。男女ともに自己を社会的対象として意識する傾向が孤独感と無関係であったことは、先に加藤 (1973) の指摘と一致して、青年

期中期にある者が主観的世界に閉じ込められる傾向のためと解される。また、男子でのみ高孤独感が自己内部への注意の増加傾向を伴っていたことは、そのような主観的世界への閉じ込めりが男子で顕著であることを示すといえる。さらに、男子では私的あるいは公的のいずれかの自己に過度に注意が向けられているときには孤独感と自尊心との関係が強くなる傾向がうかがわれたことも、この考えを支持する。

ところで、本研究では、男子は、女子に比べて、孤独感が高いのに自尊心も高いという、一見矛盾する傾向があった。これは、男子では、孤独感と自己意識傾向との関係が強く、なんらかの自尊心維持の心理的機制があると考えれば、理解できるかもしれない。

本研究で見出された自己意識のさまざまな側面と孤独感との関係での性差についても、孤独感自体に関する性差と同様に、発達の観点から、今後、より明確にする必要がある。

### 引用文献

- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975  
Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- Harman, H. H. 1967 *Modern factor analysis*. 2nd ed. Chicago: University of Chicago Press.
- 岩淵千明・田中国夫・中里浩明 1982 セルフ・モニタリング尺度に関する研究 *心理学研究*, 53, 54-57.
- Jones, W. H., Freeman, J. E., & Goswick, R. A. 1981  
The persistence of loneliness: Self and other determinants. *Journal of Personality*, 49, 27-48.
- 加藤隆勝 1973 青年期の発達心理学的意義 依田 新他(編) 現代青年心理学講座3 青年期の発達の意義 金子書房 Pp. 3-50.
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(I) ——孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討—— *実験社会心理学研究*, 22, 99-108.
- Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the self*. New York: Basic Books.
- Russell, D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. 1980  
The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- Snyder, M. 1974 Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- 菅原健介 1984 自己意識尺度(self-consciousness scale) 日本語版作成の試み *心理学研究*, 55, 184-188.